

10 仮説検定①（考え方と p 値）

1. 導入：本当に「平均との差」がある？（ポテトの例）

あるハンバーガーショップでは、ポテトの量は「いつも同じくらい」に見えます。
しかし実際には、毎回すこしずつ量が違います（ばらつきがある）。

今日もらったポテトは、いつもより**少ない**ように見えました。

問い：

これは**たまたま**少なかっただけでしょうか？

それとも**本当に**量が減ったと言ってよいのでしょうか？

2. 推測統計では、ここまでしか言えない

この疑問に対して、これまで学んだ**推測統計**でできることは次です。

- ・ 平均（だいたいの中心）を**見積もる**
- ・ ばらつき（標準偏差など）を**把握する**
- ・ 「だいたいこのくらい」と**説明する**

しかし推測統計だけでは、次の判断まではできません。

ここが今日のポイント

「本当に量が減ったと言ってよいか？」

＝判断（結論を出す）には、別の考え方が必要

3. だから「判断するための統計」＝仮説検定

「本当に量が減ったと言ってよいか？」に答えるには、次の考え方を使います。

1. まず**いつも通り**だと仮定する（基準を置く）
2. その仮定のもとで、今日の結果が**どれくらい珍しいか**を見る
3. とても珍しければ、**いつも通り**は怪しいと判断する

この「珍しさで判断する」方法を、**仮説検定**と呼びます。